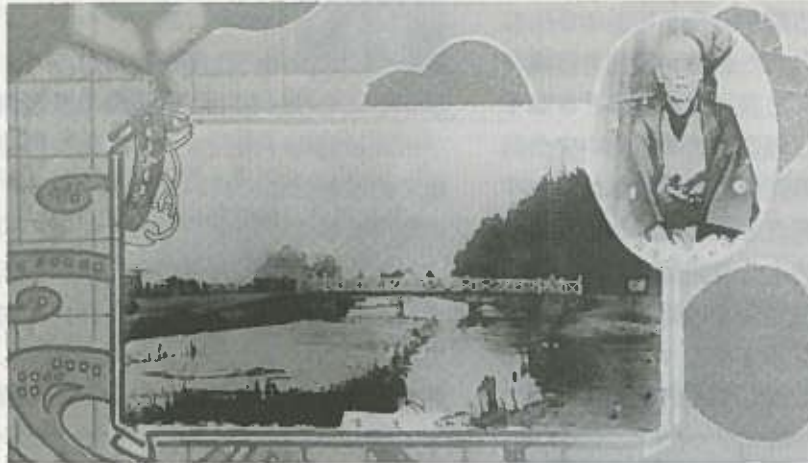


# 十和田市立 新渡戸記念館だより



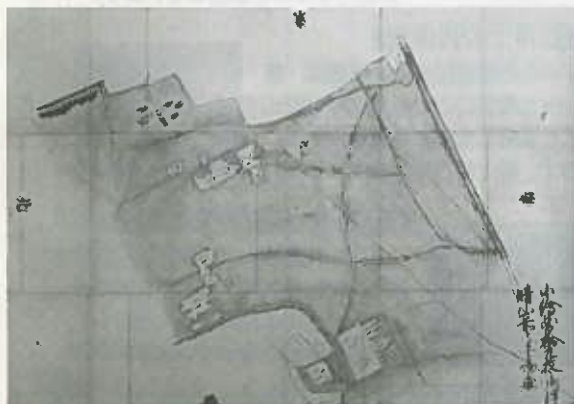
明治44年(1911)に青森県産馬共進会が三本木町で開催された事を記念して作られた絵はがきで、稲牛川と新渡戸傳翁の写真がモチーフになっています。  
(八戸在住の宮章祐氏寄贈)

## 裏打ち完了の絵図面5点を一挙公開!!

昨年始めから絵図面の裏打ち作業が進められていますが、今年始めまでにその内の27点が完了しています。内1点は6月発行の記念館だより第2号でご紹介しましたが、今回更に5点を紙上发表致します。

### ★開拓関係の絵図面から

『小絵図拾九枚』の内から、「矢神」「板澤」「晴山前」の3枚をご紹介します。これらは慶応元年(1865)の検地前後に描かれたものと思われます。絵図面の中にはその当時の村々の水田所有者の名前が記されていますので関係の方々のご来館をお待ちしています。



『小絵図拾九枚之内印板澤ト申す場所』



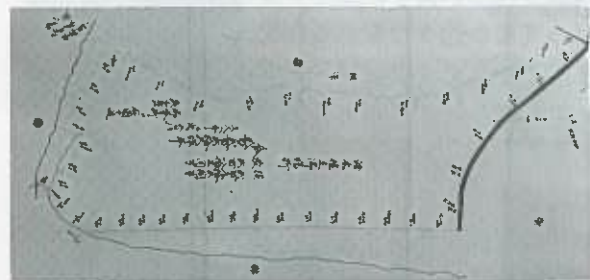
『小絵図拾九枚之内印矢神ト申す場所』



『小絵図拾九枚之内印板澤ト申す場所』

### ★植林の図面

これは文久2年(1862)5月に物見ヶ森(現稲吉付近)周辺に植林が行われた時の図面です。「諸木植立御場所」として「横296間半、長683間半、あわせて20265坪半」と書かれていることからこの植林が稲吉～牛泊までの広範囲に及んでいた事がわかります。



「植立」という沢どいに植林されたことがわかります。

### ★謎の十和田湖周辺絵図面

新渡戸記念館には、開拓関係以外にも様々な絵図面が所蔵されています。下の写真は最近見つかった絵図面で作られた目的等はまだまだはっきりしていません。十和田湖を中心に紫色に囲まれた部分には銀山等記載されていて十和田湖の小倉半島を「猿ヶ城」と書いているところも謎めいています。明治の頃の絵図面と思われます。



「三本木の辺りには「三本木駅」とありますが、これの下書きと考えられる絵図には「新渡戸傳翁開拓場」とあります。



太素顕彰会理事  
十和田市農協代表理事組合長 中川原 儀雄

稲生川流域の産米は減反政策により厳しい農業経営にある現在、今から140年前に開拓の礎を入れた新渡戸傳翁の目線が農民と直接開拓に従事する人々と共にあったことを知り感慨深いものがあります。また稲造博士が産組中央会岩手支会長として、貧困からの農民解放に尽くされ「共存共栄」の理念を提唱し実行されたこととあわせて、農業が最大の危機にある今日、このような先駆者の再登板が待たれるものであります。新渡戸記念館においては、当時の得がたい視点を、農業に従事する方々へ伝える使命にむけて、より一層の活動を期待しております。



太素顕彰会監事  
稲生川土地改良区理事 佐々木 広雄

現在2期目の国営相坂川左岸地区農業水利事業(昭53~平12予定)により稲生川の改修が行われています。また十和田市が中心になり「稲生川周辺環境整備検討委員協議会」及び市民独自の「市民フォーラム実行委員会」が組織され歴史的遺産価値の高い稲生川の学習・見学を兼ねた憩いの場所として、法量取り入れ口周辺並びに市街地流域における水環境整備事業が実現化の方向にあります。この一日も早い着工を期待し、新渡戸記念館が清き流れの稲生川とともに先人の教えを脈々と伝え、訪れる人々に感銘を与える施設となることを望んでおります。

平成7年12月の新渡戸記念館ニュースより

### 五千円札はこうして作られた

五千円札の肖像の新渡戸稲造は当記念館所蔵の写真をももにつくられたものですが、皆さんはお札がどのようにデザインされ、印刷されるか知っているでしょうか？

平成7年12月の記念館ニュースでは、お札の製造工程をわかりやすく解説しました。

#### ①) お札のデザインを決定する

お札のデザインは大蔵省印刷局の工芸官により作られます。まずデザインをどうするか色々な資料を集め検討します。そして工芸官は偽造防止のための特殊な技法を折り込み時代考証も考え合わせてデザイン案を作ります。最終的に大蔵大臣がデザインを決め印刷原版作りが始まります。



原画を作成する

#### ②) お札の原版を作成する

お札の原版は、肖像や唐草紋様の凹版部分とドライオフセットによる地紋部分に分けて作ります。肖像部分は偽造防止のため最も大切ですので熟練の工芸官が「ビュラン」という特殊な彫刻刀で丁寧に軟鋼に彫っていきます。この彫刻はとて難しく一本一本息を止め彫っていきますが、少しの失敗も絶対に許されません。



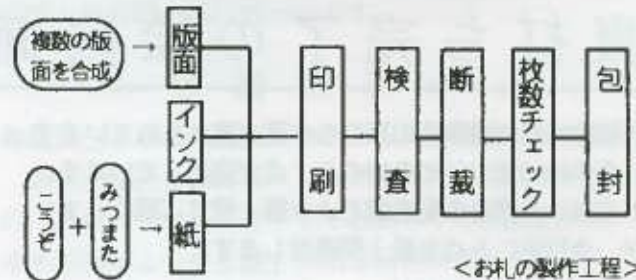
原版を作成する工芸官

肖像などの手作業による部分と、彩紋など機械によって彫られた部分をつなぎ合わせてひとつの原版にした後いくつかの製版工程を経て印刷用の版面を作ります。凹版印刷では1センチ平方あたり約1トンもの印刷圧がかかるので仕上げにはうすくクロムメッキを施します。

#### ③) お札を印刷する

お札は印刷局が開発した「ドライオフセット凹版輪転

印刷機」で印刷されます。この印刷機はお札の片面のたくさんの絵柄を一度に印刷できる特殊なものです。



<お札の製作工程>

### 五千円札マメ知識

#### 『地球の絵』



五千円札の地球の絵は稲造博士が「願わくはわれ太平洋の橋とならん」という大志を抱いて国際親善に尽くし、晩年は日米関係改善に努力した事を象徴しています。

#### 『稲造博士の肖像画』

五千円札の稲造博士の肖像画は、養子となった姪のこことさん夫妻の結婚式に夫人と出席した時の写真をもとにしたもので、博士は当時56才でした。



#### 『五千円札裏面の逆さ富士』



五千円札裏面の「逆さ富士」は昭和11年に写真家・故岡田紅陽氏が上九一色村の本栖湖畔から撮影した富士山がもとになっています。



(大蔵省印刷局記念館発行パンフレット等を参考に作成)

11月の新渡戸記念館  
ニュースパネル

平成8年1月の新渡戸記念館ニュースより

古文書の世界II 『太素日誌』から

### 新渡戸傳と囲碁の風景

『太素日誌』(たいそにっし)は、三本木原開拓の祖新渡戸傳が15歳の時(1807年)から書いていた日記をもとに自らの一生をつづったものです。その『太素日誌』の中で、傳は自分の人生や考えを淡々と記述していますが、そこからは人間・新渡戸傳が感じられます。

今回の記念館ニュースでは『太素日誌』から、新渡戸傳の趣味の一つだった「囲碁」にスポットをあてて、傳の一面を覗いてみました。(年齢は全て数え歳です)

#### ● 趣味としての囲碁・・・傳23歳の時

文化12年(1815)23歳の頃の記述で、傳は趣味として弓と囲碁を上げています。しかし、どちらも上手くなることはあまり考えず余暇の楽しみとして行っていたようです。傳はこの日誌のなかでよく実生活に役立たない学問などについて批判を述べていますが、そのような考え方からも趣味の上達にことさらには執着しなかったのかも知れません。

#### ● つらい川内時代の心和むひとこま・・・傳29歳の時

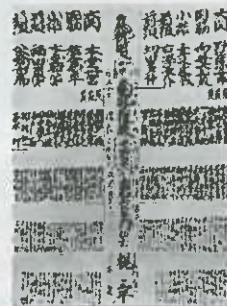
文政3年(1820)傳の父維民が川内(現在の下北郡川内)に流されたため、当時28歳の傳も川内で暮らすこととなります。そこでは慣れない田舎暮らしがまわっていました。翌年正月7日の川内の薪取り解禁日に従者と2人で薪とりに出かけた傳は、不慣れなため手を切るばかりで一人分の薪束も作れなかったようです。「そのような様子を哀れに思った泉龍寺の住職は、一日でも休みをと碁会へ誘ってくれ、その日の分の薪は家に届けてくれた」と傳は書いています。他にも土地の人に情けをかけられた事を感謝の気持ちを込めて書いています。

#### ● 碁を囲碁を通して交友を深めた商人時代・・・傳34歳の時

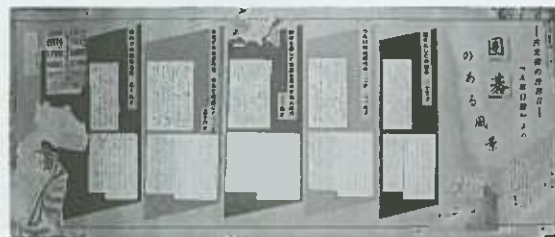
川内での生活の苦勞から文政5年(1822)30歳の頃傳は商人となります。最初は小間物屋から始めました。その後材木を扱うようになり名前も安野屋素六と改め、34歳の頃には江戸の有名な材木問屋とも商取引をするようになっていきます。日誌には、材木商と親しくなった一つの要因として、多くの材木商が囲碁を趣味としていたことがあげられています。彼らは良く碁会を催し傳はそれに出席するうち囲碁を通して彼らと打ち解け円滑な商取引が可能になったものと思われます。意外なところで傳の趣味が生かされたと言えるでしょう。

#### ● 藩内での囲碁の流行・・・傳59歳の時

南部藩士に戻って十数年後の嘉永4年(1851)藩内で囲碁が流行し、碁会がいつも開かれていたという記述が日誌の中にあります。下の写真は、その頃の「囲碁番付表」です。それを見ると傳の名前は前頭三枚目のところに書かれていて、なかなかの腕前だったことがわかります。息子十次郎は世話役として名前を連ねています。この記述以降、日誌に囲碁の記述は見当たりません。傳はこの翌年には三本木原開拓の見分を行っていますので、開拓で忙しく囲碁について書く余裕もなかったのかも知れません。



珍しい囲碁番付表



一月の新渡戸記念館 ニュースパネル

### 2月の新渡戸記念館ニュース 太素塚再発見!! その2 太素塚境内に新しいモニュメント登場!

太素塚に続く道の舗装が完成し、新しいモニュメントが設置されました。2月の記念館ニュースではこのモニュメントにどんな意味が込められているのかご紹介しました。

#### ★三本木原開拓当時の測量器具と新渡戸稲造の蔵書印をモチーフにしたモニュメント

噴水前の地面に埋め込まれたモニュメントで、稲造博士の蔵書の一冊「地方大成」から開拓当時の測量具「大方儀」の解説図と、博士の蔵書印をアレンジしたものです。



新しいモニュメントを見る市上切田小学校の皆さん

#### ★穴堰工具をモチーフにしたモニュメントと街路灯

稲生川の穴堰工具「ばんづる・なかづる・てんぱづる」をモチーフにしたモニュメントも噴水前の地面にあります。また太素塚前の通り(産馬通り)に「ばんづる」を模した街路灯もできました。



ばんづるの街路灯



二月の新渡戸記念館ニュースパネル

— 関 連 情 報 —

●水沢市立後藤新平記念館より稲造博士の写真提供頂く  
この度、水沢市立後藤新平記念館より後藤新平男爵と新渡戸稲造博士の写真3点が複写提供され、さっそく展示しております。これは大正8年にアメリカで撮影したもので、アメリカ視察にたちよった当時の外相・後藤新平の一行と新渡戸稲造のスナップ写真です。



←リンカーントンネルで



←車に乗ってリラックスするお一人

●三本木小学校田中校長より三本木の古い写真を頂く  
三小・田中泰邦校長より義父田中将一さんの昭和7年三本木農学校卒業アルバムから写真を拡大コピーして頂戴しました。これは太素塚・稲造博士の告別式・古い町並みと秋祭りを写したものです。



昭和初期の秋祭り

●宮章祐さんより明治の絵はがき寄贈頂く  
八戸在住の宮章祐さんより明治の頃の絵はがき2葉が寄贈されました。宮さんの先祖は三本木原開拓に協力した南部藩士で、特に植林に貢献した宮謙平です。(内1枚を1面で紹介しました。)

●国際交流の場としての新渡戸記念館  
当館は国際交流の場としても活用されています。昨年12月にはルーマニアのスピルハレット大学から日本文化の勉強のため来日中のイワナ・マテイさんが来館。今年2月には青森県との友好協定をもとに交流を行っているロシアのハバロフスクから青森県立郷土館の昆主任学芸員の案内で外務省より依頼の研修員モルチャーノヴァさん(ソールネチヌイ地区文化課長)とクルシェヴァさん(コムソモーリスク地区文化課長)が来館しました。



←ロシアの方々と



←イワナさんと

●ルーマニアで新しく発行された「武士道」を寄贈頂く  
新渡戸稲造博士の名著「武士道」は各国の言葉に翻訳されましたが、このルーマニア語版は現在でも首都ブカレストで発行されています。昨年再版の「武士道」をルーマニア国立ブカレスト大学院在学中の新渡戸常憲さんより寄贈されました。「武士道」は約百年の時を経てなお日本の文化を世界に伝える役目を果たしています。



ルーマニア語版「武士道」表紙



「武士道」中表紙

●昨年6月に復元された絵図面を館内に展示中  
記念館だより第2号の一面で紹介致しました復元・裏打ち完了の絵図面「五戸通七戸通新田願場所絵図面式枚之内」を当館一階に展示中です。

— 活 動 報 告 —

●館長三本木原開拓について十和田市民図書館で講演  
新渡戸館長を講師に、三本木原開拓の逸話を新渡戸傳の一生をおってわかりやすくお話しする郷土史講話「三本木原開拓よもやま話」の第2回目が3月14日に十和田市民図書館で開催されました。

●今年2月から資料整理を開始  
昨年4月より記念館の体制が充実されてきましたが内部の機能が整い、この2月から館内の資料の整理を開始しました。新しく資料台帳・カードなどを作成し、貴重な資料の分析・研究・展示・保存に向け早期に完成するよう進めていこうと思っています。この間新しい発見がありましたら記念館だより等で発表したいとスタッフ一同張り切っております。

●記念館ニュースの展示方法を変更  
今年からの資料整理に備えて、毎月テーマをかえて展示していた記念館ニュースを3ヵ月に2回に変更しました。その代わり今まで玄関パネルにのみ展示していたのを1階展示室にも1ヵ月間展示することになりました。また今年2月から当館での展示が終わったあとの記念館ニュースを十和田市民図書館ロビーに展示しています。

— 編 集 後 記 —

資料の整理に入り、一日一日が緊張の連続です。“この一点”は、これしかありませんので手袋の手先に力が入ります。後世に残すための目録作成は、地味で根気のいる仕事ですが、一同一生懸命努力しております。

発行 十和田市立新渡戸記念館  
〒034 青森県十和田市東三番町24-1  
TEL (FAX) 0176-23-4430  
印刷 有限会社 岩間印刷所